

山口県の地質物語 -8 : 周防変成岩とその広がり

岩国市北部から周南市を経て防府市南部にかけて広く分布し、山口市中部から宇部市・山陽小野田市の南部にも露出する結晶片岩類を**周防変成岩** (Nishimura, 1998) という。山口県の地質概要図では“中生代高压型変成岩”と呼んでいる (本シリーズ -6 参照)。

周防変成岩は肉眼的には、原岩の相違に基づいて、片理の発達した泥質片岩 (図1)、砂質片岩、珪質片岩、塩基性片岩、蛇紋岩などに区分される。顕微鏡下では、図1の顕微鏡写真のように、片状の変成鉱物 (白雲母など) が片理に平行に配列している様子がよくわかる。また、塩基性片岩の変成鉱物の組合せは、パンペリー石-アクチノ閃石相から青色片岩相 (藍閃石片岩相) に属し、秋吉帯の弱変成岩もパンペリー石-アクチノ閃石相の低温部に相当している。これらは周防変成作用による一連の**変成相系列**、すなわち**高压型**をなすものと考えられている (西村ほか, 1989)。本岩の形成年代は変成鉱物の放射年代測定から、**約2億年前** (230~160 Ma ≡ トリアス紀-ジュラ紀) とみなされている。

本岩の広がり (図2)、近畿地方西部から中国地方を経て九州地方中部に及び、さらに南西方の長崎県野母半島を経て沖縄県の石垣・西表島にも達している。このような周防変成岩の帯状分布を**周防変成帯 (周防帯)** という。周防変成帯は上位の秋吉帯と下位の美濃一丹波帯とにはさまれ、北傾斜の低角度断層で接している。

周防変成帯の北部には、**蓮華変成帯**が並走している (図2)。この帯の岩石は**蓮華変成岩**と呼ばれ、周防変成岩と肉眼的にも顕微鏡下でもよく似ているが、放射年代が古く、**約3億年前** (330~280 Ma ≡ 前期石炭紀-前期ペルム紀) を示す。県内では、長門構造帯構成岩石の一部として、西部にわずかに産出している。以前は、周防変成岩と蓮華変成岩とを合わせて、**三郡変成岩** (Kobayashi, 1941) と呼ばれていた。 (文責: 西村祐二郎)

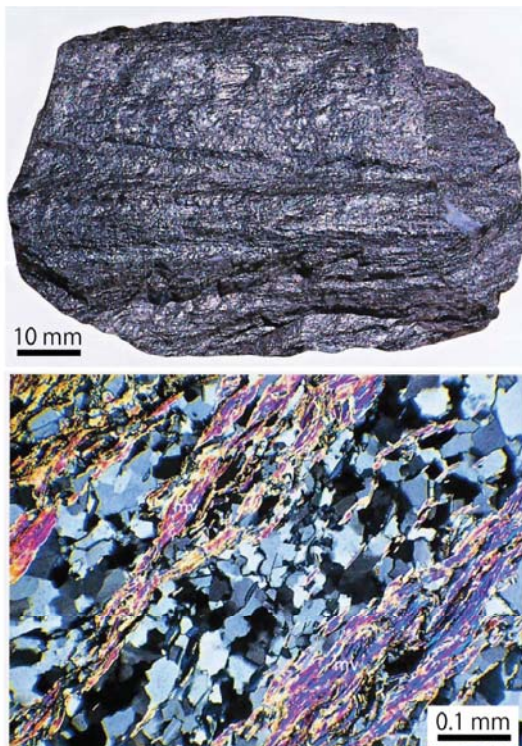


図1 泥質片岩と顕微鏡写真

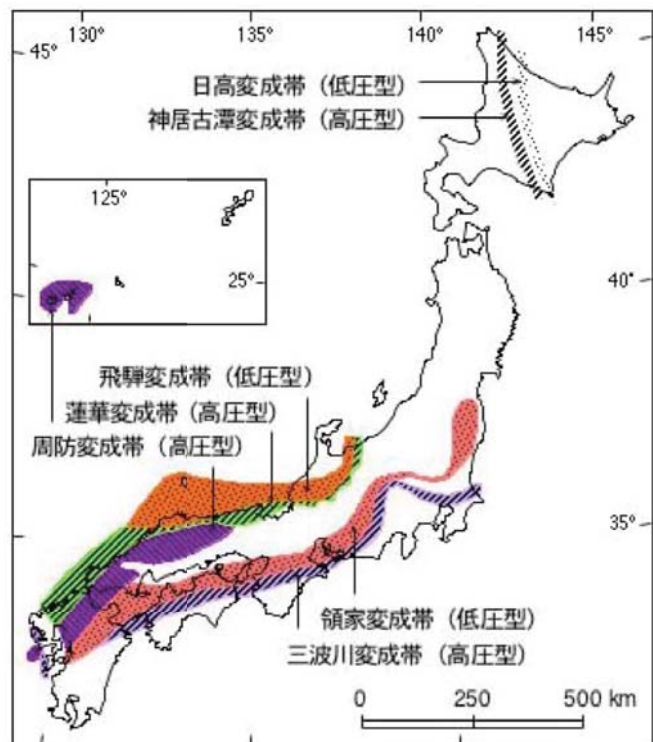


図2 日本のおもな広域変成帯 (西村ほか, 2010)